

二〇二五年度（令和7年度）

横浜女学院中学校

E 入学試験問題

令和7年2月3日（午後）

国

語

注意

- 1 指示があるまで開けないでください。
- 2 問題は、22ページあります。
- 3 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 4 時間は50分です。

受験番号

氏名

— 次の文章の——線①②③④のカタカナを漢字に、漢字をひらがなにしなさい。また、文章中の漢字の間違まちがいを1か所ぬき出し、正しい漢字に直しなさい。

新紙幣しへいに描しづかれているる渋沢栄一しぶざわえいいちは、近代日本資本主義の指導者である。一橋家に仕え、慶喜よしのぶが將軍を継つぐのを契機けいきとして、幕臣まくしんとなった。遣欧使節けんおうの一員として渡欧とわうした際に西歐せいおうの近代的産業などを見聞①し、後に新政府の要請ようせいにより大蔵省おおくらしやう、現在げんざいの財務省の役人に登用とうようされた。その数年後には退官たいくわん、第一国立銀行の頭取②にシユウニン③し、以後財界の長として目覚ましい活躍かつやくを示した。また、身寄りのない子どもや病気で働くことがコンナン④な人を集容する養育院よういくいん（現東京都健康長寿医療センター）の院長を六十年間務め、社会的支援しえんにも力を注いだ。

二 次 の 文 章 を 読 ん で 、 あ と の 問 い に 答 え な さ い 。 (字 数 制 限 の あ る 問 い は 、 句 読 点 や 記 号 も 1 字 に 数 え ま す 。)

私 の 故 郷 ^① だ も あ る 島 根 県 の 隠 岐 の 島 、 こ こ で い ま 面 白 い 動 き が あ り ま す 。 隠 岐 の 島 に は た く さ ん の 島 が あ り ま す が 、 そ の 中 の ひ と つ 、 中 ノ 島 の 海 士 町 ^{あま} で 、 こ れ か ら の 民 主 主 義 を 考 え る た め に 絶 対 に 無 視 で き な い こ と が 起 き て い ま す 。

こ こ は 本 当 に 田 舎 ^{いなか} で す 。 ど れ ぐ ら い の 田 舎 か と い う と 、 隠 岐 の 島 へ の 交 通 は 飛 行 機 が 一 日 二 往 復 し か あ り ま せ ン 。 フェ リー で 行 く と 三 時 間 も か か り ま す 。 新 聞 は 昼 ま で 来 ま せ ン 。 そ れ も 夜 中 に 印 刷 ^{いんろう} す る の で は 間 に 合 わ な い の で 、 か つ て は 野 球 の ナ イ ター の 結 果 が 六 回 の 裏 ぐ ら い ま で し か 載 ^の つ て い な い こ と も あ り ま し た 。 そ の ぐ ら い 早 め に 印 刷 し て も 、 届 く の は よ う や く 昼 過 ぎ 、 本 土 か ら の 最 初 の 船 が 来 て か ら で す 。

海 士 町 に は 、 そ の 隠 岐 の 島 か ら さ ら に 船 を 使 つ て 行 く の で す 。 い ま 隠 岐 の 島 全 体 で 約 二 万 人 の 人 が い ま す が 、 海 士 町 は 人 口 二 三 〇 〇 人 ぐ ら い で す 。 し か し 行 つ て み る と 驚 き ^{おどろ} ま す 。 町 の 中 に と にか く 若 い 人 が 多 い 。 I 港 の 観 光 案 内 施 設 ^{しせつ} に は ス リ ラ ン カ か ら 来 た と い う 外 国 人 も い ま す 。 こ れ は 、 も と も と は こ の 島 に 縁 の な か っ た 人 が や つ て き て 定 住 す る イ タ ー ン ^③ の 成 果 な の で す 。 三 〇 〇 人 を 超 え る 移 住 者 が い て 、 し か も 定 住 率 も 高 い 。 こ の 動 き の 中 心 に な っ て い る 人 の ひ と り が 阿 部 裕 ^{ひろ} 志 ^し さ ん で す 。

若 い 頃 の 彼 の 夢 は 、 ロ ケ ッ ト を 作 る こ と だ っ た そ う で す 。 ト ヨ タ 自 動 車 で 働 い て い る と き に は 、 副 社 長 に 「 ト ヨ タ 自 動 車 で ロ ケ ッ ト を 作 り ま し ょ う ! 」 と 直 訴 ^{じきせ} し た こ と も あ る そ う で す 。 ち ょ っ と 無 謀 ^{むぼう} な ところ が あ り ま す ね (笑) 。 そ の 彼 は あ る と き 思 い 立 っ て 、 イ タ ー ン で 隠 岐 の 島 に 移 住 し ま す 。 ネ ッ ト 関 係 の 仕 事 を す る N P O を つ く っ た も の の 、 最 初 は や る こ と が

全くなかったそうです。

田舎の人は、他所よそから来た人を警戒けいかいするところがあります。自分から一生懸命けんめい、愛想あいそうよく挨拶あいさつしてもちよつとよそよそしい。仕事もない。そこで彼は草むしりをしたそうです。歳としをとると草むしりはたいへんです。黙だまって草むしりをしていると、次第しだいに「なんかよくわからん若者が来たが、結構いいやつみたいだ」という感じに気に入ってもらえる。そのうち「お返しだ」と魚をくれたりするようになる。いま高齢者こうれいしゃばかりになってしまった田舎では、労働力はいくらでも必要です。草むしりがお金になったりはしません、一旦いったんみんなに認めてもらえれば、物々交換ぶつぶつこうかんで思いのほか食べていけます。

そうやって暮らしているうちに、彼は、この海士には良いものがたくさんあるのに十分に活いかしていない、もつと何とかできるはずだと考えるようになります。阿部さんたちはネット通販を開始します。また、阿部さん自身が手がけたプロジェクトではありませんが、例えば「隠岐牛」の商品化があります。

隠岐には牛がたくさん放牧されています。断崖絶壁だんがいぜつぺきを歩いて、足腰あしこしがとても鍛きたえられていますので、肉質はすごくいい。ところが、隠岐の島から本土まで六〇キロメートルも離れていますので、その輸送コストを考えると、いくら質が良くても25値段が高くなり過ぎます。商品として成り立たない。そこでこれまで、仔牛こうしのうちに松阪まつさかに売ってしまっていました。もちろん肉は松阪牛として売られますし、仔牛は買い叩たたかれます。

これを何とかしようと、^④隠岐の人たちは発想てんかんを転換てんかんしました。いままでも十分に質の高い牛なのですが、さらに質を高め、松阪牛の上をゆこうというのです。安い方が有利な価格競争では大生産地に絶対に勝てません。しかし質ならば競争できる。それならいつそのこと日本一、いや世界一を目指そうというのです。日本一の牛肉になれば、少々値段が高くて買っ

てもらえます。実際、いまや市場では松阪牛よりも隠岐牛の方が高い値がついています。

⑤ いま世界でいちばん進んだ、新しい生き方かたをしているのは海士町だというプライドを海士の人たちは持っています。その彼らがいまいちばん力を入れているのは教育や人材育成です。町には隠岐島前高校おきじまぜんという全学年でも三十人くらいしか生徒のいない廃校はいこう寸前の高校がありました。彼らはその学校を復活させようと考えました。島の子だけでは生徒が足りないので、島留学のプログラムをつくり日本各地から生徒を集める。グラミン銀行のユヌスユヌス総裁そうざいなどの世界的な著名人ちよめいじんとテレビ電話で対話する特別授業を行う。全国から塾じゅくの先生を招いて授業をしてもらう。あの手この手をく繰り返して、一学年二学級に倍増しました。じつは隠岐島前高校は県立です。海士町は、基本的には県立高校のプログラムを変えたりはできません。ところが彼らはほとんどん学校を変えるアイデアを出し、障害も乗り越こえてゆきました。いまでは大学を作ろうという声まで出ています。

島ではそのほかにもいろいろな工夫を繰り返しています。Iターンの制度にも工夫があります。いくら海士町はいいところですよと言われても、一生いっしょう涯住がめるかどうか普通は考えてしまいますよね。コンビニもない町です。そこで海士町ではIターンの人に、二年間研修生として受け入れ、食べていけるくらいの仕事をまわし、住まいを提供する。二年経たつたところで帰りたいれば帰ってもいい。そのかわり二年の間に島のもので何か良いものを見つけて、産業化するアイデアを出して欲しいと言っているのです。いいアイデアには町役場がお金を出して事業化します。岩牡蠣いわがきや隠岐牛やお茶、それに安倍首相が所信表明演説で取り上げて話題になった「さざえカレー」など、そこからヒット商品が次々に生まれました。

新しい移住者ばかりが活躍かつやくしているわけではありません。自治体には総合振興計画ふっこうけいというものがありますが、それを策定

するとき、海士では一年間かけて新旧の住民が議論しました。そして「町の幸福論」というタイトルの計画を作りました。「海士町をつくる24の提案」という素敵すてきな別冊まで付いています。ここには「一人でできること」「十人でできること」「百人でできること」「千人でできること」に分けられた具体的な提案と、どの窓口に相談すればいいかというアドバイスまで書かれています。いまや海士町には若い人が増える一方。彼らはここから日本社会を変えようと血気盛けつきさかんです。こういう社会の変わり方があります。

これまで私たちは民主主義⑥を勘違かんちがいしていたのかもしれませんが、自分では何もせず、ただ文句を言うだけでは本来の民主主義とは呼べないのかもしれませんが。古代ギリシアで生まれた民主主義は、デモクラシー、すなわち「デーモスの支配」を意味しました。デーモスは「民衆」「普通の人びと」の意味で、元々は必ずしも良い言葉ではありませんでした。デモクラシーの反対語にアリストクラシー（貴族政治）という言葉があります。このアリストは「優れた人」という意味です。デーモスによる支配を意味するデモクラシーには、たとえそれがどんなに優れた人だとしても、すべてを一部の人に任せではダメだ、ごく普通の人びとが自分たちの力で社会を運営してゆく、人任せにしない、という意味が込められていました。海士町の阿部さんたちの活動は、本来の意味で、民主主義の実践じっせんなのです。民主主義はこんなふうにもつくることのできるものなのです。

（この授業は二〇一四年二月一日に行われた） 60

（宇野重規『新しい民主主義をつくろう』より）

問一 —— 線①「故郷」(1行目)の「故」の意味と同じものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア 故事 イ 故障 ウ 故意 エ 事故 オ 故国

問二 —— 線②「面白い動き」(1行目)とありますが、これを言いかえているか所を30字以内でぬき出し、最初の5字を答えなさい。

問三 I (8行目)に入る語として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア だから イ もちろん ウ たとえば エ ただ オ しかも

問四 —— 線③ 「Ｉターンの成果」（９～１０行目）とありますが、その説明として適当でないものを次から１つ選び、記号で答えなさい。

ア 港の観光案内施設にはスリランカから来たという海外の人のように、もともと島に縁のなかった人々が定住している。

イ 島留学のプログラムで育った高校生たちが世界的な著名人の特別授業を受け、全国から集まった塾の先生がその高校生のために大学をつくることを考え始めた。

ウ 海士町にある良いものを商品化し、ネット通販によって他の地域の人たちに、その商品の良さを知ってもらうことができた。

エ Ｉターンの人たちに対して、仕事や住まいを提供するかわりに、その二年の間に島に関連する良いものを産業化するアイデアを出してもらっている。

オ 安倍首相の所信表明演説で取り上げられ話題になった「さざえカレー」は隠岐のＩターン研修生による産業化アイデアによって生まれた。

問五 —— 線④ 「隠岐の人たちは発想を転換しました」（２８行目）とありますが、どのような発想に転換させましたか。２０字以内で答えなさい。

問六 —— 線⑤ 「いま世界でいちばん進んだ、新しい生き方」(32行目)とありますが、筆者がこのように感じる理由を説

明したものととして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 島の外から若い人材を呼び込み、その人たちが都会で学んだことを島に還元かんげんしてもらおうことで、新たな社会の中心を作ろうとする生き方だから。

イ 島外から取り入れた新しい考え方を用いながらも、島の人自らが島にある魅力みりょくを外部に発信するという新たな自治を築こうとする生き方だから。

ウ これまでは島の中でできることを線引きし最善を尽くしてきたが、これからは日本一という目標をかけた規模を大きくしていくようにする生き方だから。

エ 島の過去の失敗を受け、最も大事にしなければならないのは教育や人材だと気づいたので、それらを育成するための基盤きばんを作ろうとする生き方だから。

オ 島の問題を島内だけで解決しようとするのではなく、それらを国の課題として知ってもらおうとする生き方だから。

問七 —— 線⑥「民主主義」(52行目)とありますが、筆者のいう「民主主義」の実践例として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

- ア 海ごみの問題に対して、自治体がポイ捨てを取り締まり、個人で出たごみを持ち帰るように促す。うなが
- イ 市長選挙の際に演説を聞き、その主張に疑問が残ったため、その場で質問し解決しようとする。
- ウ 農村復興のために、新たな地域の特産品について村長を中心に議員が意見を出し合う。
- エ エネルギーの活用法に対する提案を、市民から集め、議論の場を開く。
- オ 少子化問題の解決に向け、国会議員が国会で議論し、新たな解決策を考える。

問八 本文で述べられていることとして適当でないものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 中ノ島には隠岐の島への交通手段として、飛行機かフェリーがあるが、どちらの交通手段も時間の制約が大きくかかってくる。

イ 海士町へ移住した阿部さんは、島の人たちからの信頼を得るために自分の出来ることを探し、草むしりなどをしていた。

ウ 海士町では島留学のプログラムがあり、廃校寸前の高校を復活させるための手立てとして日本各地から生徒を募集ぼしゅうしている。

エ 海士町の自治体には総合復興計画というものがあり、これを策定する際に元々島にいた人々で具体的な提案などを議論した。

オ 「町の幸福論」という計画の別冊である「海士町をつくる24の提案」では、対象の人数によって提案を分けたことで誰にでも取り組みやすいように作られた。

三 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(字数制限のある問いは、句読点や記号も1字に数えます。)

祖父が倒れたという祖母からの知らせを聞いた私は、幼い頃の記憶を思い出した。記憶の中では湖のほとりに咲き乱れる赤い花が広がっており、私はその花の正体を思い出せずにいた。

翌朝、しばらく迷ったけれど、会社を休むことにした。祖父の具合は悪くはなさそうだし、この家からでも出勤できないわけではない。それでも、もう少しここにいて祖母の役に立ちたかった。私はあの頃の何もできない幼児ではない。祖母にはきつくなった掃除の手伝いくらいはできる。それに、ここにいる間に赤い花の呼ぶ声をもう一度聞きたいとも思った。

赤い花、赤い花、と歌うように繰り返しながら私は欄間や高い箆笥の上にはたきをかけ、障子の棧を拭き、床に雑巾をかけた。家はⅠ 半分もきれいににならない。赤い花の正体もつかめない。レンゲ草より大きくて、華やかで、甘い匂いがある。祖母に聞いても知らないという。

久しぶりにこの家の中をⅡと見てまわって、台所に日めくりカレンダーがかけてあることに気がついた。一日一枚、花の絵が描かれ、あとは日にちを表す数字と、その横に小さく曜日が入っているだけだ。カレンダーはいらん、といていた祖父の力強かった口ぶりを思い出す。

そうだよ、と私は光の射さない台所でコップに水を汲みながら、声に出してみる。祖父がカレンダーを気にしなかった分、祖母がひそかに気をつけなければならなかったこともあったろう。一日分の日にちと、隣に曜日が寄り添うように書か

れたカレンダーは、一日一日だけを眺めて暮らしていた祖父母によく似合った。

午後の面会時間を待って病院を訪ねると、祖父も母も静かな顔をしていた。念のために祖父はしばらく入院することになるそうだと。

「なんでもねんや、大げさなんや」

祖父は寝たまま笑ってみせ、それから真顔になって私にいった。

「瑞穂、仕事はどうした」

「あ、今日はちよつと」

「休んだんか」

祖父の太い眉が寄せられる。気に入らないのだろう。

「明日は行くよ」

私がいうと、傍から祖母も口添えしてくれた。

「じいさんを心配して休んでくれたんやがの」

「おまえの仕事ちゆうのは、ほんない加減なものなんか」

これならだいじょうぶだ、と私は思った。②いつもの祖父だ。

それで、その日の晩、母と私は町へ帰った。判断を間違えたとは思わない。祖父自身がそれを望んだ。

次に面会に行ったとき、祖父は急速に衰えて、一日の大半を眠って過ごすようになっていた。祖母から容態の説明を受け

ながら、私はきつと泣くまいと心に決めた。そう決めておかなければ泣いてしまうかもしれない。働きづめで身体を壊し、入院してから初めて駆けつけて泣くようなつまらない娘と孫しか持たない祖父が不憫だった。

それなのに、祖父の寝顔は思いがけず穏やかで、折れそうな気持を支えてくれる。

「今まで休まなさすぎたんだよ、少しゆっくり休んだらいい」

動揺が少し落ち着いたところで、私は祖父にささやいた。聞こえているのか祖父の頭が小さく揺れる。

「それでまた元気になったら、いっぱい働けばいいじゃない」

あわててつけ足す。祖父ならそれを望むと思ったからだ。

すると、祖父は目を覚ましたらしい。うつすらと瞼を開き、私を認めてかすかに微笑んだ。唇が薄く開く。何かをいおうとして震える。

「なに？ じいちゃん、水？」

祖父の口もとに耳を近づけると、祖父は小さい声で、でもはっきりといった。

「……キト」

「え、ごめん、なんていったの」

「キ、ト」

よく聞き取れない。こまって傍らの祖母に助けを求めようとしたその瞬間、あ、と思った。キト。するするっと記憶のファイルが開いた。むかし、祖父の口から何度も聞いたキト、街の名前だ。

「そうだ、じいちゃん、よくキトのこと話してくれたよね」

古いファイルの中から、街の名前と、高い山と、抜けるような青空、甘い香りを放つ赤い花が飛び出してくる。

「キトで遊んだの、楽しかったね」

祖父は満足そうにうなずいた。

祖父母の家に預けられていた頃のことだ。祖父は夕餉の後、私を膝の上に抱えて、キトという街の話をしてくれた。

その街は古代から栄えた都市で、赤道直下にあるのに、標高が高いため暑くもなく寒くもない。一年中気温が安定していて、晴れた空には富士と見紛う美しい山がそびえている。めずらしい鳥が飛び交い、鮮やかな花が咲き乱れ、木々には赤い大きな実がなっている。祖父はまるで見てきたかのように街の様子を話し、幼かった私は夢中で聞いた。その街の澄んだ空気を胸いっぱい吸った気がする。

③ 祖父母の家を離れてからも、キトは私をなぐさめてくれた。母の帰りの遅い晩、ひとりで蒲団に入って空想の街で遊んだ。55
その街にはちょうど私と同じ年頃のきれいな女の子も住んでいて、すぐに仲よくなって走りまわった。さびしいときはいつでもキトへ飛べばよかった。

その、キトだ。いつから忘れていたんだろう。長い間、思い出すこともなかった。赤い花の影が脳裏に浮かんでからさえも、レンゲ草までしか遡ることができなかった。祖父は今、静かに眠っている間にキトで遊ぶことができているんだろうか。それは、いいことなのか、さびしいことなのか、私にはわからない。

今夜はそばについていたいという私の申し出は母に却下された。

「だいじょうぶ、すぐにどうこういうことはないって」

私の背を押す母の目には光がない。

「それより、ばあちゃんをお願い、瑞穂がすっかりついていてあげて」

そのとき、祖父が何かをいった。

「なあに？　じいちゃん、どうしたの？」

「ベリカード」

祖父がかすれた声を出す。

「ばあちゃんに聞け。ぜんぶおまえにやる」

そういつて祖父はまた目を閉じた。なんのことだかわからなかった。ばあちゃんに聞けと聞いていたけど、聞かれた祖母
だつてこまるだろう。

ところが家に帰ると、祖母は思いがけずあの街の名前を口にした。

「キトやと、懐かしいのう」

「ばあちゃん、キト、覚えてるの？」

祖母は意外なことをいった。

「覚えてるもなも、キトやろ、忘れたりせんわ」

「キトって、むかし、じいちゃんが話してくれたお話に出てくる街だよな？」

「ほや、きれいな街やったの。エクアドルの首都やとの」

「エクアドル？　って、南米の？」

「赤道直下ちゆうてたな。ほや、ベリカードやったの、えんと、銀の缶かんに入ってたはずやけど」

祖母は黒光りする簞笥ひきたしの抽斗ひきたしを上から順に開けはじめた。私の中のキトがぐらりと傾かしぐ。^④

「キトって、じいちゃんの頭の中の街じゃなかったの」

自分の声が聞き取れない。たしかに、キトはあった。祖父の頭の中だけでなく、私の頭や胸やきつと血液の中にもキトは入り込んでいただろう。祖母も、もしかしたら私たちふたりの会話を聞いていたかもしれない。だけどそんな話とは明らかに違う。キトはエクアドルの首都だと祖母はいつたのだ。

「あったあった、これや」

錆さびの浮いた銀の平べったい缶を大事そうに取り出し、祖母はそのまま私に手渡てわたしてくれた。

固い蓋ふたをこじ開けると、中に絵葉書大のカードが詰つままっていた。端はしが薄茶色うすちやいろに染まっているものもあり、ひと目で古いものだと見て取れる。これがそのベリカードか。いちばん上の一枚を手に取り、裏うらを返した私はあつと声を上げそうになつた。

キト。キトだ。胸の中にあったあの街にそっくりの風景がそこに写っていた。富士に似た、でもさらに鋭角えいかくな尾根おねが、青々とした空を背景りんに凜りんとそびえ、手前には澄んだ大きな湖がその姿を映している。

「キトってほんとうにあったんだ」

夢の中の出来事がほんとうだったと知らされたような、祖父とふたりだけでつくった架空の街がⅢの下に曝されるような、緊張と弛緩がないまぜになってやってきた。

「ペリカードって、なに？」

そう聞く声がかからからに乾いている。思わず唾を飲み込んだ。

「ラジオ聴くやろ、ほの内容を書いてラジオ局に送るんや。ちゃんと聴いてたことがわかればラジオ局がペリカードを送ってくれる」

受信の証明書のようなものと思えばいいだろうか。青い鳥の写真が印刷されたカード、見たこともない果物の写ったカード、満面の笑みをたたえた少女のカード、そして、赤い花のカード。

祖母が隣に腰を下ろす。

「懐かしい。これも、ああ、これもや、ぜんぶじいさんと集めた」

アンドレスの声、と日本語で記されている。キトのラジオ局の名前らしい。

「何の番組に周波数を合わせようとしてたんやったか、たまたま飛び込んだきた声があつての」

そういつて祖母は目尻に皺を寄せ、手元の赤い花のカードをじつとのぞき込む。

遠く離れた日本の片田舎で、祖父のラジオがエクアドルからの電波を受信する。現地の日本人向けの放送を偶然つかまえたのだろう。祖父と祖母はたぶん地図を開いてキトの場所を確かめた。そうして地球の反対側まで、拙い受信報告書を送った。ペリカードが返ってきて、ふたりは心を躍らせる。幾度も放送を聴き、幾度も報告書を書く。そうして一枚ずつペリ

カードが届けられる。ふたりして目を輝かせてカードに見入ったことだろう。

そのときの様子がありありと目に浮かぶ。私を膝に乗せて話してくれたのは、たぶん祖母とふたりでじゅうぶんに楽しんでその後だったに違いない。どこにも出かけたことのなかった祖父母に豊かな旅の記憶があったことに私は驚き、やがて甘い花の香りで胸の中が満たされていくのを感じていた。

(宮下奈都『遠くの声に耳を澄ませて』より)

※1 欄間：天井と引き戸・障子などを立てる、上の溝のある横木の間にある開口部

※2 夕餉：夕方の食事

問一 —— 線①「赤い花の呼ぶ声」(5行目)とありますが、このか所にはある表現技法が使われています。同じ表現技法

を使っているものとして適当でないものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア パソコンが不機嫌になる イ 春風がささやく ウ 小鳥が笑っている

エ かつお節が踊っている オ 波に乗る

問二 (7行目)・II (9行目) に入る語の組み合わせとして最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア	I	まだまだ	II	だらだら	イ	I	まだまだ	II	じっくり
ウ	I	それほど	II	じっくり	エ	I	それほど	II	ゆっくり
オ	I	ほとんど	II	ゆっくり					

問三 ———線②「いつもの祖父だ」(27行目)とありますが、その様子を表すものとして最適なものを次から1つ選び、記

号で答えなさい。

ア 家族の言動に対して厳しく、特に子や孫から恐れられている様子。

イ 自分のことはいつも後回しで、周囲の人のことばかり気にしている様子。

ウ 中途半端ちゆうとはんぱな気持ちで仕事をする他者に対して、それを決して許さない様子。

エ 働きたいという強い意志をもち、仕事に対して厳格な姿勢である様子。

オ 働くことに対して責任感を持ち、仕事だけを生きがいに行っている様子。

問四

——線③「キトは私をなくさめてくれた」(55行目)とありますが、このか所の説明として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 自然豊かな地でのんびりとした生活に憧^{あこが}れている私は、どんなに辛いことがあるかとキトに行くことを目標に乗り越^こえてきたということ。

イ 幼い頃祖父から聞き、空想の中で何度も遊びに行ったキトは、「私」にとって辛いことや寂^{さび}しい気持ちを忘れさせてくれる存在であったということ。

ウ 祖父の話に出てきたキトには現実の世界では見ることのできない世界が広がっており、それは私に生きる活力を与えてくれていたということ。

エ 現実世界でネガティブな感情になった時には、空想世界のキトを訪ねることで自分自身の気持ちをごまかしていたということ。

オ 「私」は、空想世界のキトが現実世界にも必ず存在していると信じ、それを発見することを希望にして今日まで生きてきたということ。

問五

——線④「私の中のキトがぐらりと傾ぐ」(81行目)とありますが、この時の「私」の「心情」について70字以内で説明しなさい。

問六 Ⅲ (94行目) に入る語を漢字2字で答えなさい。

問七 ———— 線⑤「甘い花の香りで胸の中が満たされていくのを感じていた」(112～113行目)とありますが、この時の「私」の心情として最適なものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 一度は崩れかけたキトのイメージが、祖父母の温かい思い出によって改変され、新たな理想郷が浮かんできたことで安心している。

イ 祖父と祖母が受け取ったベリカードから、私の知らない二人の姿を想像できたことに驚きを隠せずにいる。

ウ 祖母の話から私の記憶の中の「赤い花」の謎なぞが解けたことで、今まで悩み続けてきたことが解消されすっきりしている。

エ 今まで祖父は厳しく接しづらい印象だったが、祖母の話の二人の関係がほほえましく、今後は良い関係が築けそうだと思っている。

オ 旅行に出たことのなかった二人の話はとても興味深く、祖父と祖母のことをもっと知りたいと強く思っている。

問八 本文で述べられていることとして適当でないものを次から1つ選び、記号で答えなさい。

ア 私が会社を休んだのは、祖父の具合のことや祖母の手伝いのためなど複数あるが、記憶にある「赤い花」について知りたいとも思ったからである。

イ 祖父が入院した原因は、働きづめで身体を壊したからであり、初めて面会に行ったときには心配のいらなような言動が見られた。

ウ 長い間忘れていた「キット」は、入院している祖父の口からその名前を聞くまでは思い出すことすらできなかった。

エ ベリカードとはラジオの受信証明書のようなもので、祖父と祖母は、放送の内容をラジオ局に送り、ベリカードが届くことを楽しみにしていた。

オ 缶からでてきたベリカードを見た私は、感動のあまり目に涙を浮かべ、祖母は祖父との思い出を振り返り、感傷にふけっていた。

問九 あなたにとって「ベリカード」のように、人と人をつなぎ、豊かな想像力をもたらしてくれる物は何ですか。100字で書

きなさい。

